

## 社会福祉領域の専攻学生におけるレクリエーション教育のあり方

森田清美（東北文化学園専門学校）

### 1. はじめに

近年、少子高齢社会のわが国において社会福祉をめぐる役割と期待が年々強くなってきている。特に障害や高齢の問題は社会の中心的課題となり、医療・保健社会福祉等様々な分野でその施策が進められている。1988年に社会福祉士及び介護福祉士制度において、介護福祉士の養成カリキュラムにレクリエーション指導法が必修科目として位置づけられて以来、福祉サービスの領域での認識が少しずつ変化し、ノーマライゼーションの視点とQOL(生活の質)の向上を背景に高齢者の生きがいに深く関わるものとして認められている。今後、福祉サービスを提供しようとする社会福祉の現場からますますレクリエーションの役割に対する期待が高まってくるものと期待される。その期待にこたえていくためには、福祉系の大学、短大や専門学校のレクリエーション担当者が学生たちにレクリエーション援助を効果的に教授できる方法を研究開発する必要があるだろう。しかし、学生が社会福祉施設の実習中にどのようなレクリエーション支援をしているのか、その実態を明らかにした研究はほとんどみられない。学生が社会福祉施設の実習でレクリエーションのかかわりから授業内容の重要性を評価していくことは、レクリエーションの指導法をいかに教えるかという「指導法の指導法」として今後の授業展開に役立つものと考えられる。つまり、レクリエーション教育(教育内容)を学生の現場実習の視点から検討することや学生の現場実習をレクリエーション教育の視点から検討することがレクリエーションの実践と研究を進展させると考える。

そこで、本研究は学生の実習でのレクリエーション支援の実態から望まれる教育内容や技術を明らかにし、今後のレクリエーション教育のあり方を検討することを目的とした。

### 2. 研究方法

本研究では、社会福祉系を専攻している学生に対して集合調査法にて質問紙調査を実施した。調査期間は2002年12月16日から2003年1月16日である。有効回収標本数は144、回収率は96.0%(144/150)であった。

質問紙の調査項目は、実習中のレクリエーション支援の有無、実習中にレクリエーション担当した時間、レクリエーションにおけるレクリエーション支援形態、施設のレクリエーション活動頻度、教育内容重要認識度などについての項目と、自由記述式である実習中の具体的なレクリエーション活動や授業への要望などについての項目で構成されている。項目の内容については、2002年12月の予備調査で得られた自由記述事項や面接法、介護福祉士養成テキストから得た項目を検討し設定した。

本研究におけるデータの加工、および統計処理は、統計パッケージ(SPSS11.0 for Windows)を用いて行った。なお、危険率5%水準を持って統計的に有意とした。

### 3. 結果及び考察

表1 サンプルの属性

調査項目	対象者%(n)	調査項目	対象者%(n)	
性別	男性	34.7(50)	就職希望先 介護老人福祉施設 63.2(91) 一般企業 16.7(24) グループホーム 12.5(18) ディサービス 10.4(15) 児童福祉視施設 6.9(10) 障害者福祉施設 6.3(9) その他 9.0(13) (複数回答) 100(144)	
	女性	65.3(94)		
		100(144)		
平均年齢	20.8歳			
年齢階層	20歳未満	61.1(88)		
	21～22歳	29.2(42)		
	23歳以上	9.7(14)		
		100(144)		

## 1) サンプルの属性

本研究の対象となった福祉系専攻の学生の属性を表1に示した。対象者の性別は、対象学科の構成比を反映して女性の回答が6割を占めた。平均年齢は、20.8歳で、年齢階層別では20歳未満が6割と高校を卒業して進学したものが大半を占めている。学生たちの就職先の希望職種は老人介護福祉施設が63.2%、次いで一般企業16.7%とその他はグループホームやディサービスを希望しており、福祉系の学科に所属し、就職先として福祉の現場を考えている学生が大半である。

## 2) 実習中でのレクリエーション支援の実態

社会福祉施設の実習中に学生は、どのようにしてレクリエーション支援を行っているのだろうか。実習時のレクリエーションの関わりをレクリエーション支援の有無、担当形態、担当時間で考察する。

学生が社会福祉施設で実習したレクリエーション支援の実施経験の有無については、73.6%の学生が「ある」と答え、大半の学生がレクリエーション支援を経験していることがわかった。

レクリエーションの担当形態では、実習中に学生がレクリエーションを担当したときにどの程度まで、支援したかについては、52.8%が学生自身に全部任せられていることがわかった。実習中にレクリエーション支援を経験している学生でレクリエーションの内容を全て任せられているものは半数を超える結果になっている。また、一部、補助ともに約20%が支援している。これらを見ると全部、一部、補助含めるとほとんどの学生が何らかの形でレクリエーション支援を経験している。

レクリエーション支援の担当時間については、30分以内が30.2%、20分以内が19.8%、40分以内が14.2%と20分から40分のなかでの担当時間が多い。その他に食事前の少しの時間、施設内でのクラブ活動やレクリエーションタイムなどが始まる前の少しの時間を利用した10分程度の時間を担当している学生は13.2%おり、1時間以上任せられている学生も1.3%いる。福祉施設では、毎日、週間、月間でのレクリエーションタイムが位置づけられていることが多く、結果よりその時間は40分以内が多いことがわかった。施設職員の中には、レクリエーション活動のマンネリ化で何をするか頭を抱えている職員が多く、実習生が実施するレクリエーション支援に期待をよせている施設も少なくない。このように担当時間の特徴より10分程度の手遊びや歌などの気楽で簡単に出来るもの、40分以内の様々なゲームやクラフト、料理などの活動をたくさん盛り込んだ愛好クラブやグループでのレクリエーション、1時間以上を要する行事的な活動まで時間に区切ったレクリエーション活動や計画方法の指導の必要性が伺えた。

## 3) 実習中のレクリエーション活動内容

実習中に学生たちが、どのようなレクリエーション活動を支援したかについて調査した。その活動には歌が34.9%であり、手遊び、手話ソング、楽器演奏、体操などを含むと音楽を利用した活動が多い。さらに、花笠音頭29.2%、おはぎの歌18.9%と地域の民謡や季節に応じた歌などがつづく。その他の活動内容では、伝言ゲーム、オセロ、ジャンケンゲームなど、ほとんどが座ったままで出来るゲーム類や車椅子リレー、テーブルテニス、ゲートボール、ソフトバレー、卓球などのように身体活動を求めたスポーツ類を実施していた。これらの内容をレクリエーション担当教員に知らせ、授業内容が実習にどのように影響しているかをインタビューした。そうするとほとんどが授業で実施した内容であることがわかった。つまり、授業をとおした様々なレクリエーション体験は、実習において多く活用されていることがわかった。

## 4) レクリエーション活動援助法の教育内容の重要認知度について

介護福祉士養成テキストより、レクリエーション科目における教育内容17項目を設定し、その重要度について「5:非常に重要である」「4:やや重要である」「3:どちらともいえない」「2:あまり重要でない」「1:ほとんど重要でない」までの5段階評定尺度を用い、それぞれ1~5の得点を与えた。そして、この得点を実習中のレクリエーション支援の実施・非実施別に平均値を算出し、Mann-Whiney検定を行ったものが表2である。実習中にレクリエーションを実施した学生についてみると「レクリエーションの持つ意味と生き立ち」、「ソーシャルグループワークにおけるレクリエーション活動の意義」、「援助のための組織の運営と役割」以外全て高い数値を示しており、なかでも実習中におけるレクリエーション活動の実施・非実施両群の間に有意差が見られたのは、「レクリエーションのある介護」、「個人や集団のレクリエーション活動援助」の2項目であった。これは、実習でレクリエーション支援を経験したほとんどの学生がレクリエーションに関する教育内容として、重要であることを認識していることを示して

いと考えられる。これらの結果から、社会福祉の現場実習でのレクリエーション援助経験の有無によって授業でのレクリエーションに関する教育内容の重要認識度には相違があることが示唆された。福祉サービス利用者のレクリエーションの機会を考えたとき、時間的には恵まれているはずである。それを生かして毎日の生活を楽しく送り、楽しみを通じて生きがいを求めていく“生活を楽しむ”ということが「レクリエーションのある介護」における重要な課題であろう。そのためには、個人の嗜好に合わせたレクリエーション援助、個人の社会性・交流を促進するための集団を介したレクリエーション援助や様々なレクリエーション活動をとおして個人、集団の成長段階について理解する「個人や集団のレクリエーション活動援助」が重要になってくる。とくに、社会福祉系を専攻している学生は、実習施設が特別養護老人ホームや老人保健施設が多いことから、‘介護におけるレクリエーション援助の意義’と‘個人や集団に対するレクリエーション援助プロセスと援助方法’は、教育内容には必須と考えられる。

表2 レクリエーション支援の実施・非実施別にみた教育内容の重要認識度について  
(5段階尺度の平均値の比較)

項 目	実施 (平均±標準偏差)	非実施 (平均±標準偏差)	U 値	検定
1. レクリエーションのある介護	4.55±0.70	4.09±1.22	1429.5	*
2. レクリエーションのもつ意味と生き立ち	3.54±1.04	3.54±0.92	1825.5	n.s.
3. 社会福祉の中でのレクリエーションの役割	4.09±0.85	3.89±0.76	1534.5	n.s.
4. 生活とレクリエーションの関係	4.05±0.98	3.83±1.04	1608.0	n.s.
5. 介護福祉サービス利用者へのレクリエーション活動の意義	4.02±0.98	3.74±0.98	1555.5	n.s.
6. 個人や集団のレクリエーション活動援助	4.42±0.86	3.89±1.16	1269.5	**
7. ソーシャルグループワークにおけるレクリエーション活動の意義	3.86±0.79	3.63±1.00	1635.0	n.s.
8. 利用者のレクリエーションニーズを知る	4.40±0.74	4.20±0.83	1622.5	n.s.
9. 援助者側からのレクリエーション計画の作成	4.31±0.74	4.17±0.86	1711.0	n.s.
10. 援助のための組織の運営と役割	3.90±0.89	3.57±1.01	1517.0	n.s.
11. 安全なレクリエーションの実施	4.76±0.51	4.63±0.65	1704.5	n.s.
12. ホスピタリティトレーニング	4.39±0.70	4.43±0.74	1772.5	n.s.
13. アイスブレイキング	4.42±0.68	4.11±0.99	1572.0	n.s.
14. 他の専門職やレク支援者間の連携	4.27±0.82	4.34±0.84	1738.5	n.s.
15. 治療的意味合いを含めたレクリエーション	4.41±0.85	4.34±0.91	1792.0	n.s.
16. 高齢者のレクリエーション	4.68±0.56	4.43±0.85	1562.0	n.s.
17. 障害者のレクリエーション	4.60±0.64	4.54±0.66	1757.0	n.s.

\*P<0.05, \*\*P<0.01

##### 5) 実習を終えた学生の授業への要望

実習を終えた学生から自由回答より得た授業への要望を簡単に実技内容と講義内容に分けた。実技内容については、片麻痺、痴呆、車椅子など障害に応じたレクリエーション活動を知りたいということや、高齢者だけでなく、一般人、子どもを対象にしたレクリエーション活動を知りたいという要望であった。高齢者だけでなく様々な対象者に合わせたレクリエーションを経験させることが必要であることがわかった。また、準備しなくてもよい簡単なレクリエーションを要望している学生も多い。お誕生日会や季節行事のときに利用者に見せるためのレクリエーションでは、花笠音頭などの踊りやバルーン、楽器演奏、手品など学生個人の趣味、特技を見出すようなものを授業で取り入れていく必要があることがわかった。また、その他におはじき、ビー玉、お手玉などの伝承遊びや五感を使用したレクリエーション、指先を使う折り紙やちぎり絵、歌などの実技を要望している。

次に、講義内容についてみると、施設利用者が生きてきた時代背景を知りたいという要望が多く見られた。利用者のレクリエーション活動を考えていく中で、生きてきた時代背景を知ることが、レクリエーション活動を計画し

ていくうえで大変重要な作業である。レクリエーションアセスメントの中に、既往歴、ADL、余暇歴、趣味や特技などを加え、さらに、時代的背景を加えて、計画していく必要性が伺えた。また、施設では実際どのようにレクリエーションが行われているのかを教科書だけでなく視聴覚教材（ビデオなど）を利用して理解したいという要望があった。施設のレクリエーションをイメージし、より理解を深めるために有効な教材であることから利用していく必要性が伺えた。場面に合わせたレクリエーションプランの立案では、誕生会、花見、七夕、クリスマス会などの季節行事に合わせ、施設内での具体例を含めて理解する必要がある。したがって、場面に応じたレクリエーション援助の進め方や注意点、対象者の気持ち、アレンジ方法は、別々に指導するのではなく一連の流れとして、場面に応じて随時説明していく必要性が伺えた。

#### 4. まとめと今後の課題

- 1) 実習中でのレクリエーション支援の実態については、担当形態では、ほとんどの学生が全部、一部、補助を含むと何らかの形でレクリエーション支援を経験していた。また、担当時間では、20分から40分の担当が多かった。これらのかかわりの程度やレクリエーション活動の所要時間を考えながら、時間的に区切って計画が出来るよう配慮する必要がある。
  - 2) 実習中のレクリエーション活動内容は、歌、手遊び、手話ソング、楽器演奏、体操などを含むと音楽を利用した活動が多かった。また、そのほとんどの活動が授業で実施した内容であった。これらのことから学生たちに出来るだけ多くのレクリエーション活動に出会えるような実技授業を工夫する必要がある。
  - 3) レクリエーション活動援助法の教育内容の重要認知度については、「レクリエーションのある介護」「個人や集団のレクリエーション活動援助」の2項目において、実習中のレクリエーション支援の経験がある学生の方が教育内容の重要認知度が高く、有意差が見られた。したがって、これらの2項目においては、実習で活用できる実技以外の講義内容として重点をおき指導する必要がある。
  - 4) 授業への要望では、対象者別・障害者別に応じたレクリエーション、簡単なレクリエーション、見せるためのレクリエーションという3種類の指導方法を授業内容に盛り込むことが要望されていた。また、その中で、レクリエーション計画の立案方法に重点をおき、進め方や注意点や配慮する部分、対象者に合わせたアレンジ方法を提示していく必要がある。
- 以上、この結果を授業にフィードバックしていくことで、より実践的で活用できる教育内容になるものと考えられる。

#### 5. 文 献

- 1) 松永敬子. 介護福祉におけるレクリエーション援助の実態に関する研究. レジャー・レクリエーション研究. 1997;37:40-43.
- 2) 介護福祉 1996 秋季号. 特集介護とレクリエーション活動. 財) 社会福祉振興・試験センター. 1996;13-88.
- 3) 財) 日本レクリエーション協会. 特集:福祉レクリエーション援助の可能性. 自由時間研究. 財) 日本レクリエーション協会 1997;20号:6-42.
- 4) B.ミケルセン公演記録. 障害をもつ人々への福祉のあり方—ノーマライゼーションの思想を実践に学ぶ—. 日本ソーシャルワーカー協会会報7号. 1985;7.
- 5) 手塚直樹. 検証、市町村障害者計画. ノーマライゼーション6. 1997;8-27.
- 6) 千葉和夫. 広い視野にたった介護を！—生活援助の再確認—. 介護福祉 1995 冬季号. 1995;10.
- 7) 千葉和夫. 高齢者レクリエーションのすすめ. 東京:中央法規出版. 1993.
- 8) 財) 日本レクリエーション協会編. 社会福祉とレクリエーションの課題—ディサービス事業とレクリエーション—. 財) 日本レクリエーション協会. 1991.